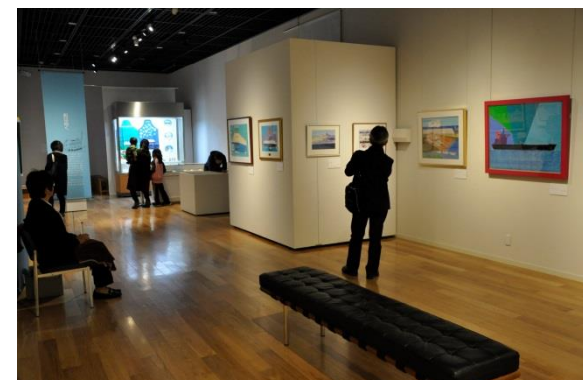


開催館名 苫小牧市美術博物館

企画展名 特別展「柳原良平の海・船・港」

開催期間：平成29年9月9日（土）～平成29年11月12日（日）



### 【企画展の内容・目的】

- 「アンクルトリス」を生み出し、多彩な仕事で知られる柳原良平（1931-2015）の創造の根底には常に船への憧れや情熱があった。本事業では、柳原の船への関心がどのように展開し、作品として表現されてきたかについて紹介した。
- 苫小牧港からの航路を有する株式会社商船三井や苫小牧港開発株式会社などからの協力を得て、海上で活躍する様々な船の役割と歴史を紹介する展示や付帯事業を実施することにより、わが町の海への親しみを醸成することをめざし、総合博物館としての特質を活かした美術展にとどまらない多角的な視点での海の学びを提供した。

# 1. 企画展示の内容

- 開催期間：平成29年9月9日（土）～平成29年11月12日（日）
- 開催場所：苫小牧市美術博物館 第1、第2展示室
- 入場者数：4,080人



苫小牧市美術博物館 外観



展覧会会場 入口



自らを「船キチ」と称し、無類の船好きとして終生を過ごした柳原良平は幼少の頃より船を好んでいた。彼の表現活動の原風景には、少年期に大切にしていた船の絵葉書からのインスピレーションもあったように思われる。柳原にとって船を表現することは、絵画作品のみならず、文章、雑誌の発行など多岐に渡った。

ここでは柳原良平が少年時代にあつめた船の絵葉書と、船の絵葉書から大きな影響を受けたことがみてとれる作品を展示。船の模型や資料に囲まれた自身のアトリエを描いた絵画作品には、船に関する資料が創作を支えていたことを自ら提示するものである。また、ここで紹介した船の絵葉書は、後の作品と構図、表現方法にかなりの類似点がみられ、両者の展示は柳原が受けた船と船に関する資料からの強いインスピレーションを視覚的にわかりやすく提示することになった。



監修・テキスト執筆を独立行政法人海技教育機構に協力をいただき、作品に登場する船を可動式のパネルを用いてクイズ形式で紹介した。作品に登場するフェリーや商船などのモノを運ぶ船、ダグボートやクレーンなどの港で働く船や機械などを可動式のクイズパネルや写真で紹介することで、海や港の豊かな学びを深めることをねらった。パネルにした船の選出には、実際に苫小牧港でみることのできるものや苫小牧港近郊で使われているものにし、港への関心を高め、足を運ぶきっかけを生み出そうとした。

パネルの仕様は、子どもたちが楽しみながら海の学びを深めてもらえることを考え、可動式のクイズ形式にし、テキストは全てルビを振り、幼児が読めるようにした。まとめて紹介したほか、展示作品の近くにも個別に配置し、柳原の作品に描かれる船の知識を補うパネルとしても活用した。



ここでは作品の中にも多く描かれているカーフェリーの「さんぷらわあ」の模型と、「人と物をはこぶ フェリーの今昔」をテーマにしたフェリーの歴史や役割についてパネルで提示した。監修は株式会社商船三井による。

パネルの目的は、フェリーや旅客船などわたしたちが実際に利用できる身近な船を紹介することで、海をつかって行き来すること、モノを運ぶことを考えてもらうきっかけを与えることにある。現在運行しているフェリーのみならず、戦前に運行していた船も紹介し、その歴史や役割の変遷をわかりやすい語り口と写真で紹介した。さらに、このコーナーでは苫小牧港で活躍している現役の船や港で働く機械をクイズ形式で紹介するパネルも設置し、子どもたちが能動的に楽しみながら学ぶことのできる空間作りに努めた。



展覧会では、1884年4月1日に商船三井の前身にあたる大阪商船株式会社が設立されてから創業120年を迎えた2004年に発行されたカレンダー原画である《商船三井120年の船》のシリーズを紹介した。本作は表紙を入れて13点、のべ73隻の船で商船三井の船の歴史を辿り、日本の海運史をも振り返るスケール感をもつものである。それぞれの船の差異や移り変わりがこれまで船に関心のなかった層にも親しみをもってみる事ができる空間であるように努めた。

また、展覧会の終章では柳原が終生力をいれていた海事教育にかかわる活動についても紹介した。1977年に柳原が中心になって設立された「横浜市民と港を結びつける会」の横浜市民に港や船のことをよりよく知ってもらうための活動や、後続の帆船日本丸友の会の活動に関わる資料については、会員でもある現在苫小牧市在住の方に資料をお借りした。

### 【来館者の声】

- 船での旅行もいいな～と思いました。切絵、油絵、水彩も楽しめました。(66歳・女)
- 色々な船が世界中を航海しているのだなあと思った。(38歳・女)
- 子どもたちが海での仕事などに興味や関心を持ち苫小牧を今までより、少し多く学べたと思います。(34歳・男)
- 苫小牧には海・船・港のスケールの大きいモチーフがあるのを改めて発見しました。今後、絵、写真などを通して作品を制作してみたくなりました。(女)
- 船の種類が色々あることにおどろき。時代につれて進化されていて、海の船をみたくなりました。(45歳・女)
- 海がなかったら船もないし、船もなかったら柳原さんの素敵な絵も見られなかった。その感動を伝えていくため、海をキレイに残したいと思いました。(15歳・女)

## 2. 関連事業の内容

### ■親子見学会 フェリーを見にいこう

【開催日時】平成29年9月24日（日）13:00～16:30

【開催場所】苫小牧市美術博物館、苫小牧西港フェリーターミナル  
「さんふらわあ」船内

【参加者数】34人

【実施内容・目的】

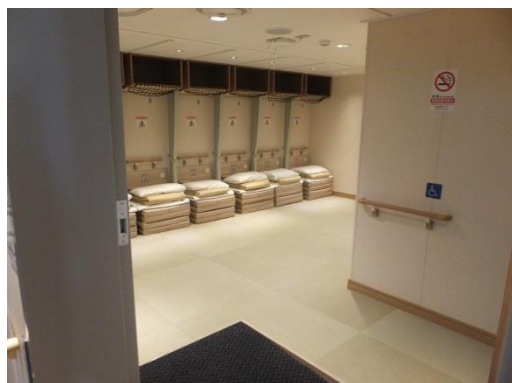
- 展覧会観覧後、柳原の作品に描かれる商船三井フェリー「さんふらわあ」の船内を見学した。下船後はフェリーターミナル内の見学やフェリーの機能や役割について実験やクイズを通して学んだ。（協力：苫小牧港開発株式会社、商船三井フェリー株式会社）



開催場所の全景の様子



受付の様子



フェリーの外観、船内を見学し、船旅のよさやフェリーの魅力を知っていただいた。苫小牧市内在住の参加者の中にもフェリーターミナルにはじめて訪れた方や、また船旅をしたことがない方も多く、驚きや感動が得られたようだ。



フェリーが浮く仕組みを、簡単な実験で学んだ。苫小牧港の役割や機能、港を行き来する船についてスライドを使ったクイズで学んだ。特に、浮力の実験では子どもたちからの高い関心がみてとれた。フェリーの実際の高さを体感したところで、船が浮く仕組みについて学んだことは、船に対する興味・関心の幅を広げることに効果をもたらすものであったと感じる。



スライドを使ったクイズでは、海や船にまつわる雑学が紹介された。例えば、船の大きさを表す「重量トン」などで用いられるトンという単位が酒樽を叩いたときの“トン”という音に由来するなどのエピソードが紹介され、「身近な生活の中にある海」を意識することにつながった。参加者に拳手をしていただきながらクイズが進行され、ゲーム感覚で海の学びを得る機会となった。

### 【来館者の声】

- 旅に海を使おうと思わなかったが、試してみたいと思った。(女)
- 海には、フェリーや貨物船などの様々な交通手段にもなっていることが分った。(15歳・男)
- 普段なかなか乗る機会がないので、よい体験になった。野って旅行してみたいと思いました。(40歳・女)

## ■ オープンアトリエ

【開催日時】平成29年9月9日（土）～11月12日（日）

【開催場所】苫小牧市美術博物館 ラウンジ（企画展展示室前）

【参加者数】2,000名

【実施内容・目的】

- 柳原良平の船の絵をカードの中央に廃止、余白部分に自由なイメージを描き込み、船のある港の風景をつくるイベントを行った。無料スペースに設置し、会期中いつでも参加してもらえるようにし、またカードはハガキサイズにすることでポストカードとしても使用できるものになっている。



開催場所の全景の様子



ポストカード制作の様子



会場ではみなとオアシス苫小牧運営協議会が主催した「みなと写生会」の成果展をあわせて開催した。実際に港に出かけ、描かれた子供たちの作品は、巨大な船を前にしたときの驚きや喜び、港の明るい雰囲気生き生きと伝えられている。

## ■知ってびっくり！海・船・港のこと

【開催日時】平成29年11月3日（日）11:00～15:00

【開催場所】苫小牧市美術博物館 マルチビジョン室

【参加者数】60人

【実施内容・目的】

●海を現場にした仕事重要性を理解し、将来の人材育成につなげる。

1部 演題：苫小牧港とフェリーについて

講師：苫小牧港開発株式会社 コンシェルジュ

2部 演題：“マリノス”こと榎戸克美さんと学ぶ 海・船・港のこと

講師：榎戸 克美 氏（元・航海士）

司会：武田 正哉（当館歴史担当学芸員）



開催場所の全景の様子



チラシ



第一部では、地元企業である苫小牧港開発株式会社に協力を得て、同社のコンシェルジュを講師にお話いただいた。パネルや使ったクイズや、苫小牧港の役割や、港を行き来する船、フェリーターミナルの仕事についてお話を伺った。来場者に参加していただく場面もあり、楽しみながら港や船、海のことを学ぶ機会となった。





第二部では、市内在住の元航海士を講師にむかえ、お話をきいた。導入として、くらしの中にある船の言葉についてクイズ形式で紹介された。飛行機の「キャビン」や「デッキ」などももともと船の用語からきている、などの豆知識を交えたお話しに、参加者は興味深く聞いている様子であった。

また、航海士ならではの知識として、船のロープの様々な結び方についても紹介された。講師がつくった結び目を見本に、どのような場面でどのような結び方が使われているのかが紹介された。



さらに、世界地図を用いて世界の海と航海にまつわるエピソードが披露された。「7つの海はどこでしょう？」という講師の質問に対して、答えられる参加者はおらず、答えを聞いた参加者からは感嘆の声があがった。また船で実際に使っていた帽子や鐘についても紹介され、イベント後には触りながらみていただく機会を設けた。

### 【来館者の声】

- 想像以上の充実した内容でとてもよかったです。大満足。苫小牧には船を見に時々来ますが、こんなステキな美術博物館があることを知りませんでした。今後も独自の企画で楽しませてください。(30代・女性)
- 今後も港に関する企画をお願いします。(50代・男性)
- フェリーターミナルへ行って実物を見に行こうと思います。(40代・女性)

## 【事業全体のまとめ】

展覧会では、株式会社商船三井及び商船三井フェリー株式会社の両本社から全面協力を得ることにより、これまで社外で公開されていない作品を含めた形で開催することができた。また、本サポート事業を活用したことにより、展覧会の「学び」のクオリティを向上させることができた。具体的には、独立行政法人 海技教育機構から協力を得たことにより、柳原良平作品の芸術的な価値のみならず船の知識に関する学びの要素を付与することができたことが大きな成果であった。この成果は、パネルクイズの展示や、フェリーの模型の借用など実際の展示などに反映させることができた。また、サポート事業申請をきっかけに、海や港に力点を置いたPRをしたことによって、フェリー利用客に興味を持たせることができ、道外から船旅で訪れた来館者が目立った。さらに、苫小牧港開発株式会社とは、2事業、苫小牧港管理組合とは2事業の連携イベントを行うなど、地元団体との連携には一定の効果があったものと思われる。成果物としては、助成金をいただくことにより、これまでの柳原良平に関する書籍には未掲載であった北海道ゆかりの作品や企業所蔵作品を掲載する展覧会図録を発行することができた。

## 3. 主な連携・協力先について

連携・協力先名称	連携・協力の内容
1. みなとオアシス苫小牧運営協議会	みなとオアシス苫小牧運営協議会が主催する苫小牧港周辺をめぐるウォーキングイベント「みなとオアシス苫小牧 みなとウォーク 2017」と連携し、特別展を観覧したイベント参加者にはマグカップをプレゼントした。
2. みなとオアシス苫小牧運営協議会	苫小牧港を会場にした写生会に参加した 42 名の作品を展示した。
3. 苫小牧クルーズ振興協議会	クルーズ船「ぱしふいっくびいなす」苫小牧港寄港に伴い、当館を乗船者を対象にした市内循環バスの降車所にした。乗船者特典として団体割引を適用し、ギャラリートークを行った。
4. 苫小牧市立中央図書館	苫小牧市立中央図書館所蔵の柳原良平関連図書の特集展示と PR コーナー「特集展示・柳原良平の本」を設営した。
5. 苫小牧市立中央図書館	柳原良平の絵本作品の読み聞かせ会を行った。

## 4. 主な広報結果について

掲載媒体名	見出し、掲載日
1. 広報とまこまい 9月号(市役所広報紙)	「特別展「柳原良平の海・船・港」 2017年9月1日
2. UNABARA 9(社内報)	「北海道でや柳原良平氏の展覧会が開催されます」 2017年9月
3. 北海道新聞(新聞)	「特別展「柳原良平の海・船・港」開幕 港町の風景楽しむ」 2017年9月9日
4. 苫小牧民報(新聞)	「“航跡”をたどる 船やナイフで海を渡る柳原良平」 2017年10月10日～12日(全3回)

以上